駒澤大學佛教學部研究紀要第四十一號　昭和五十八年三月

伝光録の世界

光地英学

（一）

「伝光録」は釈尊章（首章）から孤雲懐奘章迄、五十三章に渉っている。仏祖伝法相続の正脉である。従って禅門、就中、洞門の根基をなす至極の宝光である。これで既に伝光録の性格は一応明示されている。然し更に各章の要旨を攻究し、次いでその要旨を整理し、その上に「伝光録」の根本精神、つまり本領を究尽したい、というのが、本稿の趣意に他ならない。次に章の順に従って攻究してみる。

（要旨）〔首章〕釈迦牟尼仏

釈迦牟尼仏は出家修行の暁、一見明星、大覚成道せられた。釈尊の成道は宇宙心の体得開顕である。宇宙心の体認であるから、大地有情非情と同時成道となる。従って我等お互いや、大地有情非情が、悉く釈尊成道中のものとなる。

この間の消息を些細に認得し、各自が本来の面目、即ち屋裡の主人公と相見することにより、宇宙心と自己の本心と、一体であることを証得しなければならない。

釈尊を本師とするお互いは、み仏の覚りの真意を知ると同時に、釈尊のお悟りを、単に仏陀世尊にのみみることなく、自己の心のうちに、仏のお悟りの光りを移し、自らの心眼をひらくようにすべきである。即ち自心の悟りの上に、釈尊のお悟りを親しく生かすことこそ、仏弟子たるものの真面目でなければならない。そのことがそのまま、釈尊成道に真参することであるとともに、成道の真意現成ということにもなる。

太祖はこの趣意を説示すべく、我と我に対する与、我のうちにおける真我と、真我に対する与に当る仮我を解明、或いは法眼文益・地蔵桂琛等の言を以て示唆している。さらに頌古にて、釈尊の成道を老梅樹に擬して、仏成道を各自に生かすべきことを巧みに要結している。

〔第一章〕第一祖摩訶迦葉尊者

世尊が霊鷲山上にて、大衆の前に拈華瞬目された折、摩訶迦葉一人微笑した。この時、仏心が迦葉尊者に伝心付嘱されたと、史伝（伝燈録、普燈録等）が伝えている。しかし太祖は多子塔前にての仏との初相見、すなわち入仏弟子の時、仏の正法眼蔵が付属されたとなしている。それには迦葉が生誕時奇瑞があり、生来瑞相を具し、頭陀行に長じ、世尊よりすでに半座を分たれた身分であること等が、根拠となっているものとみられる。

迦葉尊者は鶏足山に入って入定、慈氏の下生を待っている。お互いが自己の正法眼を参得するならば、釈尊が華を拈じて空間的に不変であり、迦葉が破顔して時間的に長令である那一物と親しみうるのである。この境地に至るならば、釈尊の肉身今猶お暖かく、迦葉の微笑自らに蘇るであろう。仏心と自己の本心が同じであるから時空を超越し、お互いが迦葉に嗣ぐとともに、迦葉が各自に嗣ぐという一円相上、不離の間柄となる。お互いの居るこの処を以て霊山会上と会得し、折角精進弁道し、自らの本心を体認することにより、釈尊、迦葉と相見しなければならぬ。

〔第二章〕 第二祖阿難陀尊者

第二祖阿難尊者は、周知の如く世尊に侍すること廿年、仏の説法を親しく聴聞した人である。仏滅後、第一祖摩訶迦葉にさらに廿年侍した。仏滅後、阿羅漢果を証した仏弟子達が畢婆羅窟にて結集をするに当り、阿難尊者の誦出が必要であった。しかし未証の阿難は入窟が許されない。会〻証りの機縁熟するを看取した迦葉が、門前の刹竿を倒してくるように言った。つまりこれは旧来の迷妄の自己（阿難）を、倒却消滅し来たれとの内意に他ならない。この刹邦、阿難は大悟徹底し、入窟し仏説法を再誦する。大悟した阿難は、入仏弟子以前の仏説法をも、覚三昧によって悉く再説し、一座の弟子衆をして如来の再現説法とまで感歎せしめた。

いうまでもなく阿難尊者は、多聞広学博識強記の代表者である。がしかし、それがそのまま仏心体認に連なるものでないことは、尊者自ら示しているところで、この点を強調するところに、本章の意図がある。当章後部にて師資の間、師強資弱、師弱資強の師資二面裂破し、仏心印の伝授の面目意義を、迦葉と阿難二尊者について指説されている。この相授底のものは仏心である。仏心は真空にして妙有、真空は妙有を予想し妙有を孕んでいる。お互い学人も刹竿を倒却し、各自の本来の面目を相見するように、太祖は切に慫慂されている。

〔第三章〕 第三祖商那和修尊者

第三祖商那商邦和修尊者が、阿難尊者に、諸法本来不生不滅の本性を問い、さらに諸仏菩薩の本性を問うた。この間に対する阿難尊者の答えは、何れも商那和修の袈裟角を指した

り引いたりすることであった。それは問いの本性と、袈裟を掛けている本人、さらには袈裟そのものと別異のものではないことを、具体的に教示されたものに他ならない。単に袈裟角に止まらず、諸法悉くが本性と別異のものではない。

お互いそれ自身も、本性と即一のものである。各自は曠大劫より以来、この本性中のものであるが、一度親しくそのところのものを体認しないならば、自己が諸仏の智母であることが会得できない。この点「参禅は須らく自ら参悟すべし」とされる所以である。自ら悟得して後、始めてよく教化しうるし、またそのようでなければならない。

人或いは仏祖道は機根による、我等のよく堪えるところでないというかも知れない。しかしかかる人は、最も愚劣なものである。各自は古人の得法者が、何れも各自と相違しているところがない。得法前は恩愛名利の人であり、同じく四大五蘊の身であったが、一度志を立て参学し参徹したことを充分考慮し、究理弁道して、迦葉、阿難諸尊者と肩を並べなければならない。

太祖は大乗寺における「伝光録」講筵に参じている学人達に、宿植善根力によりこの会に集まり得たのである。折角と光陰を虚しくすることなく、工夫弁道して古人の徹処に至り、印可を受くべきであると慈誡されている。これはまたそのまま後世お互いへの策励の慈言でもあるといわねばならない。

〔第四章〕第四祖優婆毱多尊者

この章は身の出家と心の出家という問題が提起されている点が、特色であるといいうる。心の出家は、在家に居、在家生活をなしていても、心が世俗を離れ三界を超え、菩提煩悩をも超越するのをいう。

優婆毱多尊者が商那和修尊者の問に対し、自身の出家を以て答えた。和修師はこれに対し、諸仏の妙法は身心に拘わらないと説諭された。太祖は諸仏の妙法とは如何なるものかを追求説示されている。諸仏の妙法とは生不生、心不心、つまり現象や本体や本心、縁慮心（日常心）を超えた名状し難いものであるとする。これは要するに親しく覚触しないことには、八万の法門、無量の妙理も、徒らに宿世の業因による心識に左右されるばかりである。従って一度徹底空じ切る要がある。このことを迅雷一度震って、毱多耳根を断ずるのみに非ず、速かに命根を喪し、猛火忽ち焼けて、諸仏の法門、祖師の頂顎悉く灰燼と為ると表現している。毱多師も徹底空じ切り、そこから真の毱多が妙有として自ら蘇生してきたのである。参学者も毱多師の如く仏道を自らに体認するように、太祖は強く参禅者の大悟徹底を要請されている。

なおこの章の機縁に、毱多尊者、そしてまたその化導を受けた魔波旬の神通力や、波旬の帰依三宝と唱名したことども、毱多師の行実中のものとして示されているのが注目され

る。

〔第五章〕 第五祖提多迦尊者

この章に出家は身の出家であるか、心の出家であるかの問題が提起されている。五祖提多迦尊者が出家を志求するに当り、師の四祖優婆毱多尊者が五祖に問われたのは、その点である。この問に対し五祖は、身・心の何れでもないと答えた。四祖はさらに身心何れの出家でもないとすれば、誰が如何ように出家するかと問わる。五祖の答えは、我執の念がなく主客を泯絶し、主客包摂一貫の宇宙心を体認せんがための出家であるというにあった。このような宇宙心は言詮、聞解の域を超えている。

元来、心は形相なく、去来、動静を離却している。その心の真底は宇宙心に他ならない。それは大悟してはじめて味得できうる性質のものである。四祖の五祖に対する要請もこの点にある。また太祖は他の章にてもそうであるが、特にこの章にて、大悟体験の必須性を強く勧説している。

即ち一度大悟しなかったならば、徒らに知解の人に止まって、心地に通ぜず、仏見・法見・自縛・他縛から免れ得ないとする。如何に奇瑞を示しても、また三界唯心、諸法実相、悉有仏性、諸法皆空という如き大乗の妙理を会得しても、知解に止まっている限り、座主講師の見解に他ならない。自心の宝蔵を打開し、自己のうちに聖教を味到したとき、これら大乗極妙の法が自らに生きてくることになる。心すべきは悟道明心である。

〔第六章〕 第六祖弥遮迦尊者

この章は仙人道と仏道、仏道中、実乗と大乗を比較し、仏道の優位性、大乗の尊貴性を示す特色を発揮している。まず仙道について、寿命長遠、神通妙用を得ても、それは有限的のものである。後者の小乗を学し、小乗の禅定に体達し、死後生天しても、業報の尽きたた時、無間地獄に堕在しなければならない。小乗の道果についても同様で、輪廻の業が絶えるものではない。何れも要するに有為の功業で、無漏の大乗道ではない。

それとともに世間を離れて仏道を行ずべきものではなく、大乗の如く、世間のうちにあって日々修行し、煩悩を菩提に転じてゆくべきものである。ここに第六祖となった弥遮迦尊者の、仙道を捨てさらに小乗をすてて、大乗仏教に帰したゆえんがあり意義がある。

真の大乗は無漏の仏道であるから、有所得行は否定せられる。無明を断じ中道を証するということ、そして悟りを待つことなども否定せられる。道は彼方にあるのではなく、即今脚跟下に在る。お互いは生前、死後の過現未を一貫しての本心を具有している。これこそ主人公であり、真の自己に他ならない。真実の自己は面目なく、体相なく、迷悟もない。

これは法性海に如同している。この法性海からお互いの身心が生じてきているものであるが、かかる法性と一俱の自己の本心を一度親しく体認、以て真の自己に相見すべきである。太祖の要望もこの点にある。

〔第七章〕　**第七祖婆須密多尊者**

婆須密多尊者が常に酒器をもって村里に遊行していた。会〻弥遮迦尊者の遊化に出逢い、酒器を中心とした問答となる。日常の事々物々について、法の参究をするのが、古来禅道仏法の面目であるが、ここでも酒器が自心開明の焦点となっている。その糸口は酒器に対する婆須密の執着心を破析することにあった。このことから婆須密の煩悩障を解脱せしめ、大悟に導いた訳である。このことが、古え世尊が懸記せられたことにも相応している。

婆須密の師、弥遮迦の教示の本有の性、換言すれば資たる婆須密覚悟の本性は、他から受けることもできない、また他に与えようのないものである。師資一如一貫のものであるから、資が師の頂に上り、師が資の足もとに下るともいいうる。太祖はこの間のものを、虚凝一片の田地とし、古今、生死去来、皮肉骨髄を超えたものとされる。師資通貫の那一宝を切に体認すべく、学人に勧説するところに、この章の眼目がある。

〔第八章〕　**第八祖仏陀難提尊者**

第八祖仏陀難提尊者は辯才に秀逸であった。会〻行化中の第七祖婆須密多尊者にあい論義せんとした。七祖は大道の真義は論義すべきものではないと説示される。この垂言によって仏陀難提は悟入した。

太祖は拈提において、七祖提示の意義のもの、すなわち仏道は言詮によらず体験によるべきものであることを、種々な方面から懇切に説述されている。「維摩経」入不二法門品の文殊菩薩の無言無説、維摩居士の黙すら、真に道の論ではないとされる。仏道を会得するとは畢竟、仏性の体認であるが、十住の菩薩でもなお、仏性体認は不可能であると「涅槃経」を引いて説破してある。さらに洞山良价禅師が、雲巌下に無情説法の話で充分参徹し得ず、過水悟道して真の自己に徹し得たことを示してある。仏祖何れも大悟の人である。参学者も依文解義に止まることなく、よろしく実参実究、己事を究明、以て七祖提示の本義に承当するよう切要されている。

〔第九章〕　**第九祖伏馱密多尊者**

第九祖伏馱密多尊者が仏陀難提尊者に問うた言葉に、父母も真に親しいものではなく、諸仏もわが道ではないとある。諸仏のわが道でないというのは、諸仏が道を実践することが、そのまま自己のそれとはならないという意である。仏陀難提師の答えに、「汝が言心と親し」とある。つまり伏馱密多師が自己の本心と親しいということを本是となしているこ

との謂に他ならない。

自己の本来心を根基となしているから、外に有相の仏を求める要がない。直ちに意根を坐断し、見性成仏するのみである。本心は自己、佗己、万法一貫の宇宙心であるから、この一心の外に顕われる一物もない。清水の如く、虚空の如く内外もない。本心体認の上からは、無明に発している十二因縁法も転法論となり、迷いの五道の輪廻転生も、自ら大乗精神の発現となる。太祖は参学の諸仁者が、この間の消息を理解体認し、誤った見解に住すべきでないことを、懇切に説示されている。

〔第十章〕 第十祖婆栗湿縛尊者

第十祖脇尊者(婆栗湿縛尊者)が、師の伏駄密多尊者に侍すること三年、或日、本師の尊者が経典を読誦し、生滅を離れた不生不滅の涅槃の理を演説せられるのを聞いて悟道した。

伏駄密多師が経典の精神である涅槃を説述された。そのように経典を読誦する真意は、経典の精神を把えることでなければならない。了義経である大乗経典の真義は涅槃である。禅では本来心という。これを体認するのが一生参学の大事である。参学人は心地開明すべく　尊者が老令にも拘わらず猛精進され、その名の如く脇を付けて臥することがなかったことが実に三年にも及んだことを模範ともし、弁道に怠りがあってはならない、とこのように太祖は懇切に策励される。なお参学には年令の多少は関係がない、参学についての関心事は、発心の有無であるということも、この章の強く示唆しているところである。

〔第十一章〕 第十一祖富那夜奢尊者

中国禅者の相見でよく、汝何れより来り、名は何と、という問いのものがある。そのような問答が、印度の脇尊者と富那夜奢尊者との初相見に取り交された。しかし富那夜奢尊者の答えは、常識を超えた自心の上からのことであった。かねてから聖者がこの所に来ることを予知していた脇師が、富那夜奢こそその人であると思い、富尊者をして真実地に至らしむべく、諸仏を自心の外に見ないようにと慫慂せられた。

ここに於て廿一日間の修業を富師が敢為して自心即仏、即心是仏に承当された。太祖は自己の本心に契当するには、知的努力を以てすべきものではない。思慮分別を悉く捨離し、自己を仏と二つに見る相対心を放ち忘れ、無我無心にして始めて祖師道に味到しうる。それには富師の自ら示されたように、実地参究に俟つべきである。富師のこの因縁を自らに生かし是非親しく自己の本来心を体認せよと、太祖は懇切に示衆されている。

〔十二章〕 第十二祖阿那菩底尊者

この章は馬鳴尊者(阿那菩底尊者)により、仏とは何ぞやという最も近接して重要、しかも仏教の根本ともいうべき問

題が提起されている。これに対する師の富那夜奢尊者の答えは、仏とは何かを問う、識らないから問うのであるが、その識らない者こそ仏であると、是心是仏、即心即仏を提示していられる。

仏とはいわゆるの三十二相八十種好から、天人、畜生、さらには堕獄の人にまで及んでいる。それらは悉く仏である。仏とは本来心のことであるとともに、本来心の展開でもある。諸々の現象も本心と一俱の宇宙心の開示である、本心と現象との関係は、海水と波との関係に等しい。

本心は平等一相で、恰も波の大小に関することなく、すべて海水であるが如く、差別の相はない。それ自体が絶対智であるから、僅かの智も他から借りる要はないものである。

なお当章にて師資相承義が説述されている。師と資が鋸と木に喩えられる。資である木は、無心にして師たる鋸に裁かれるところに、師資が一如となって、平出しうる。ここに資は師に、蔵身し、また却って師が資に蔵身するゆえんがある。これが師資相承の面目である。畢竟、師資の本心と本心との相即相入であるとなしうる。お互いこの本具の一心を、一度体認、以て不疑の境地に到るべしと、太祖は心から要望されている。

〔十三章〕　第十三祖迦毘摩羅尊者

迦毘摩羅尊者が仏教に帰依しない以前は、外道の一派の統領であって、三千の門弟を擁していた。馬鳴尊者（阿那菩底尊者）が華氏国において法を宣布せられていたところ、迦毘摩羅師は馬鳴師の所へ来て、馬鳴師と神通力を競うた。その結果、神通力に敗れ、通力を失う結果となり、馬鳴師から三宝に帰依するならば神道を得るであろうと告げられた。そこで懺悔礼拝し、馬鳴師の仏性海の説述に依って、悟道するに至った。

お互い目に見、耳に聞くところの凡ゆる空間世界は、悉く仏性海中のものである。神変不思議を現ずること、諸種の三昧を発現すること、皆仏性海中においてのことである。一事一物として、仏性から逸脱しているものはない。宇宙心も性海であり、悉皆が性海である。一切は現象印実在の関係で、実在たる仏性の自現であり、全存在そのまま仏性海中のものである。それとともに、仏性が全存在の根源であることを忘れてはならない。各自は仏性を具有しつつ、仏性に包まれている。自己本地の風光即仏性であることを、よく認得すべきである。このように体認の場における仏性の開示という点、本章の目指す意図がある。

〔十四章〕　第十四祖那伽閼樹邦尊者

第十三祖迦毘摩羅尊者に第十四祖竜樹菩薩（那伽閼羅樹那尊者）が宝珠について質問した。これはそのまま本具の自性清浄心究明の問答となった。禅道仏法は生活場裡の事々物々

について、これらをすべてを修道の具にしてゆくところに、その特色がある。このことは、この第十三祖と第十四祖との問答についてもよく看取される。そしてこの問答の狙いは本具の一心である。

この本具の一心を証得するところに、禅及びこの章の中心問題があることはいうまでもない。

なおこの章には、以下のような諸問題が提示されている。(1)竜樹こそわが禅門の祖師である。(2)禅道修行は山林寂静処に独居して修せらるべきではなく、よろしく叢林において衆と共に修さるべきである。(3)修道の間も常に利他の念を忘れてはならない。(4)世中にあるとはいい乍ら、国王大臣等の権勢者に近付いてはならない。(5)如何なる神通力も、自心悟得のものに及ぶものではない。

〔第十五章〕 第十五祖迦那提婆尊者

第十五祖迦那提婆尊者が、仏性を宣説していられた第十四祖竜樹菩薩に相見すべく、菩薩を参訪せられた。竜樹大士が迦那提婆の智者であることを知り、侍者に命じて水を満した鉢を、尊者の座前に置きかしめた。すると尊者はその満鉢の水に、一本の針を投ぜられた。この提婆尊者が満鉢の水に一針を投ぜられたことは、人々本来具有の自性清浄心を、自己の体験上に明確に把握せられたことを意味している。それと共に、このことはこの体認により、自己の行為上に証りの働きを遺憾なく体現せられることを示されたものである。師資即通も、この体験の境地の即通に他ならない。

かかる証りは、知的に止まってはいてはならないので、飽迄も体験の場に於て、実とされなくてはならないものであることはいうまでもない。この証りこそは成住壊空の四劫にも、水火風の三災にも、左右されることのない絶対なるものである。いう如き証りを実とすること、そこにこそ禅の本旨があるというべきである。

〔第十六章〕 第十六祖羅睺羅多尊者

迦毘羅国の長者、梵摩浄徳の園樹の木菌は、曾て同家にて供養した比丘が、虚しく信施を受けたことに対する報恩行であった。つまりその比丘が転生し木菌となり、長者とその第二子、後の羅睺羅多尊者に取って食せられることに依って、報恩せんとするものであった。これは、その受ける徳の無いのにも拘わらず、徒らに信施を受けることの非と、信施に対する報恩との二点を示唆している。

今の比丘は、天地自然の恵み、国王の恩、父母の恩を受けながら、道眼もなく徒らに信施を受くるのみである。かかる状態であるならば、死後、間違いなく地獄に堕在し、極苦を受けるようになる。信施をはじめ諸恩に報ずることの本道は、道眼を清明にすることである。それには最初、発心した折の気持に還帰し、名利や衣食の為に道に入ったのではない

ことを省慮すべきである。

お互い如来の正法輪に遭い得たこの身の多幸を悦び、光陰を惜しみ、子細に参究しなければならない。もしそうでないならば、この一生に止まらず、虚しく累世を過すことになる。道眼を開くとは、他ならぬ真の自己を体認することである。各自は今日今時を思い、真の自己に承当すべく、折角と弁道すべきである。

〔第十七章〕　第十七祖僧迦難提尊者

仏教の本質である無我の提示がこの章の精神である。

先ずこの無我を提起し、我執を除去すべきことを指摘する。無我は我他彼此、取捨の妄念を含まない。そのことを禅定観にて説示する。一般に禅定は坐禅時のみにその当相をみる。しかし単に坐禅の当所に限定することなく、生活場裡悉くを禅定三昧とみなければならない。かかる意味から行も亦禅の主張によって、坐禅によることのみが禅であるという差別見を排除せんとしている。このような禅定の見方による差別見の徹廃は、この坐禅定観を通じて、無我を主張するものに他ならない。これは師資一体の上にも云いうることであり、また神秘性にも言及されうることである。蓋し神秘性は全面的に否定されるべきではなく、それが無我体認の上に、又無我を根柢ととしているところに、その仏教的意義があるものとされるからである。無我とは真我であって、古今不変易のものであることを注意すべきである。

無我は思想ではなく、その具現が要請せられる。世は末世であるとも言われるが、わが正伝の仏法こそ、この末世澆季において唯一の正法である、これを荷負する学人は、大いに精進修行、以て無我を証し、それを人生々活上に発揚すべきである。この章の狙いがこの点にあることを、特に注意すべきであろう。

〔第十八章〕　第十八祖伽耶舎多尊者

伽耶舎多尊者は出家前、一の円鑑が行住坐臥、常に尊者に伴っていて、古今の仏事が必要に応じてその鏡に映現した。同尊者が円鑑を持して、第十七祖僧伽難提師の前に現われた時、年令実に百歳であった。が機縁純熟して出家し、難提尊者の弟子となった。その時、円鏡が姿を没した。それは従来、円鑑が伽耶舎多尊者と別のものであったが、出家と同時に二者一体となったので、円鏡が消えたのである。

或時、風が殿（堂宇の軒）の銅鈴を吹き鳴らした折、師の十七祖が鈴が、鳴るのか風が鳴るのかの問を発せられた。それに対し伽耶舎多師は、我が心が鳴るのであると答えた。この問答は、後の支那六祖の風鈴問答の先駆をなすものであるが、十七祖と伽耶舎多師とのこの問答にて、十七祖が心とは何であるかという、本質論の追究となり、それが付法へと展開しているのである。思うに仏道は、我々の生活の全領域に

渉っているところのものである。殊に禅はこの点に特質を示している。禅の探究は、従って生活上の事々物々に就いて究尽される。その間、細事をも疎かにせず、これを直ちに自己究明の具として生かすのである。生活即禅ということは、この意味からもいい得る。

この章の風鈴の問答も、亦軌を一にしている、風鈴を縁として、心鳴であるとなす。心鳴の心とは、宇宙大のお互いの本心に他ならない。本心を会得するところに、時空一貫の仏祖の証契に参徹し得る所以がある。宜敷く心鳴の当所に承当し、諸仏出興の所以を明むるよう太祖は懇請せられている。

なお注目してよいことに世寿批判がある。よし世寿が百歳であっても、無量寿から見れば寸時に過ぎない。諸仏の要機を会得すれば、無量寿の内義を証得したことになって、世寿に拘わらずして、それを超越するというのである。

〔第十九章〕 第十九祖鳩摩羅多尊者

第十九祖鳩摩羅尊者が、過去世において愛着心の為に、天上界中ではあるが流転した。やがて、祖位継承の宿縁熟するによって、月支国に降生するに至った。そして第十八祖に面授、宿命智を開発した。

仏教常識論からすれば、この宿命智は単に六神通の一に過ぎない。しかしここではそれに止まらないで、太祖は心の本源を知ることであるとする。

心の本源について太祖は、凡聖、迷悟のない、本来不変の自性であり、久遠実成の如来である。悟っても増すことなく、未悟の時でも減ずることがなく、霊々として不昧、明々として不蔵なものであるとされている。かかる自己の本来性を知るのを以て宿命智であり、そのことが大悟大徹であるという徹底した見方をなしていられる。この点に、この章における太祖の卓識がみられうると共に、この章の特質が発揮されているものであるとされうる。

〔第二十章〕 第二十祖闍夜多尊者

第廿祖闍夜多尊者が、第十九祖鳩摩羅多尊者に逢い問を発した。それは宗教心があっても、必ずしも幸福でなく、悪行を為しても幸運に恵まれている、という実状から、因果業報に対する疑点であった。それに対し十九祖は、善悪の報に三時があるから、永い三世の間において観ずべきものである。一度為した行いは、如何に長時を経過しても、決して消失するものではなく、因縁の相値うた時は、必ずその応報があるものであると説示せられた。ここにおいて闍夜多師の所疑が解明せられた。更に闍夜多尊者が鳩摩羅多尊者から、業が惑、惑が識、識が不覚から生じ、その不覚の基盤が心、つまり本心である。本心は本来清浄であり、生滅造作に渉らず寂にして霊妙なものである。この提示を得て、闍夜多師は領悟せられたのであった。一般仏教では、惑業苦という、ここでは仏

教通塗の系列には拠っていない。さてこれについて太祖は、業が迷より生じていること、不覚とは無明であると補説していられる。そして無明つまり不覚の拠っている本心の体認を要請し、それには打坐すべきことを暗に慫慂していられる。本来清浄の本心を認識すれば、無明を破し清白円明、諸仏出世の境地に契当しうるのである。この章の提示の所以も、本心悟得の強い拈提に他ならない。

これは本章の狙いであり、また禅の本質論に相即するところのものであるが、なおこの章の特色として、太祖の因果業報の強い提示のあることに注意したい。三時業のうち、五逆、七遮の如き重罪は、必ず順次生に受報する。しかし仏法修行力に依り、重きを転じて軽きを受け、軽きを転じて無ならしめる功徳がある。或いは「金剛経」の所説の如く、人から軽賤せられるのは、未来の重苦を今生に軽受する理であるから、参学者が悪名を受けたり、他から、誹謗されたりするような場合でも、そのものに対し怨念を懐くことなく、受業の時に消滅することを思い、弥々修行精進すべきであると、このように垂誡されている。

〔第二十一章〕　第三十一祖婆修盤頭尊者

印度の著名な論師婆修盤頭、つまり世親尊者は、帰仏前、一食不臥・六時礼仏・清浄無欲であった。会々第廿祖闍夜多尊者の説得に会った。廿祖の所説は、世親の如き苦行錬行することで仏道を求むることではなくして、われわれの本来具有の心宝に目覚めることを基本とする点にあった。世親は直下に無漏智を発したのである。無漏智とは他ならぬ本来自己保任の心宝をいう。それは煩悩解脱の相である。この基本線を逸脱した学道、それが持斎・梵行・長座不臥や礼仏転経であったとしても、本道に連なるものではない。禅道仏法の意味するもの、そして又世親論師の得道も、この点にあったことを肝銘すべきである。

いうところの自己保任の心宝とは、曠功以来、今日に至るまで具有のもので、何ら錯っているところはない。諸仏の妙道、祖師の単伝も唯この一事にある。然るに諸人は、自己屋裡のこの宝を忘れて徒らに他人門上の霜をのみ管している状態である。参学者はよろしく世親論師のように、無漏智を発すべく、成道を遙かなる他日に期することなく、即今自己方寸の中に向って、子細に工夫点検すべきである、と太祖は懇切に垂誡慫慂せられている。

〔第二十二章〕　第二十二祖摩拏羅尊者

心の本性ということは、第二十一祖婆修盤頭尊者と第二十二祖摩拏羅尊者の問答の如く、諸仏の道であり、また禅の目ざすところでもある。この本性とは恰も虚空の如くであって、限定を超えているものである。無限定にして一切処にあらわれる。それは色声香味触の如き、我々の感覚知覚作用に

も現じてゆく。感覚知覚作用は、主客融合の上に始めて成立していて、主客の何れにその根拠を有するものであるとは規定できない。何れも相依相関の仮りのものである。仮りに成り立っているから、その何れにも固執できない。そのような固定概念を離れたところに、心の本性のあり方を看取すべきである。

ここに婆須盤頭尊者の、十八界空是なり、つまり六根・六境・六識の十八界を実体視せず、それに執せずそのものの奴とならないと教示された所以がある。いう如く一切を包摂し、無限定のままながら無の態においてあるところに、心そのもののすがたがある。この点、本心は本来常住であるから、変動に渉るものでないという如き見方をなしてはならないとして、太祖は却けられていることに留意すべきである。このようなお互いの心を、知的にではなく、実の如く体認するというのが所謂の悟りに他ならない。

〔第二十三章〕 第二十三祖鶴勒那尊者

第廿三祖鶴勒邦尊者の前生譚における、五百の門弟の食法差別見による畜生道堕在を縁として開示されている。即ち鶴勒那尊者の前生の比丘の時、五百人の弟子とともに竜宮に趣き、妙供を受けたが、五百の弟子衆は福徳薄徴にして、応供の資格がなかったので、羽族に生じた。この食法について差別相を離れて食法一如とみることから、食法の本質の究明となり、更に進んで一切諸法の平等一相観から、自心の無上大法宝について、究明すべきことにまで及んでいる。更に自心本性の体認を純熟せしむるに止まらず、仏祖の大法の嗣続、つまり面授嗣法を了ぜなくては、真の仏祖の伝燈承受者とはなり得ない。要は自己の無上の法宝参究が重要事である。無上の法宝は、古今の情を越え、生仏・煩悩・菩提等の対待のこの大法辺際を離却したものに他ならない。そして頌古において、宝の消息を、純清絶点、巨嶽の雪の比喩を以てしている。即ちこの章は、お互いの本心の参究を中心としての提示である。

〔第二十四章〕 第二十四祖師子菩提尊者

われわれが仏道を行ずる場合、仏道の究竟地を目指し、それに到達することを目的として精進する。しかし高い立場、いわゆる第一義から見るならば、それは真の仏道修行のあり方ではない。仏道行修の秘義は、無所得、無所期の念を以て、ただ純一に仏道を実参実究するところにある。有所得は染汚の法である。道を彼方に見て、道を体得しようとすることは、未だ自己と道とが二つあって、相対立した関係にある。見るものと見られるもの、行じている自己と、行ぜられている道との二つが一つに融合し、そこに行修する自分もなく、行ぜられる道もない、何ものをも望まない、ただ行ずるところが絶対境である。かかる絶対境において、真に仏道が自己

のものとなってくる。本来具有の仏心の体認についても、同様に言い得ることである。

師子尊者は師の鶴勒那尊者から、この求道における真の用心の提示を得て、仏智慧に悟入せられた。そして仏法に帰依していたが、なお有相に滞っていた罽賓国王に依って、生命を奪われるに際しても、泰然自若としていた。このことは師子尊者が、仏道の真義を親しく身証せられていたことを示す、尊い行跡であるといわねばならない。この意味において、本章は、禅道仏法体得の奥義について開示せられているといってよい。

〔第二十五章〕　第二十五祖婆舎斯多尊者

古の祖師（法然上人）の母が、その高僧の懐妊時、剃刀を呑むと夢みたとされているが、この章の婆舎斯多尊者の場合は、母が神劔を得ると夢みたという。彼此軌を一にするものがあり、感慨深いことである。第廿四祖師子菩提尊者に、婆舎斯多師が初相見の折、生来握っていて開くことのなかった左の掌を、師子尊者の〝我に珠を還すべし〟という言に依って始めて開き、手中の珠を師子尊者に奉った。その珠は前生にて斎時に布施に預った珠であって、師子尊者が同じく僧であった婆舎師に委托したものであった。

この珠は婆舎斯多師に依って、前世から今生に及ぶまで、保持されて来たところのものである。このことを太祖は問題とし、究明せられている。前世にて身を終えた時、その身は如何なるか、肉身が破壊されて四大に還帰した時、殊は果して如何なるか、如何にして保持されて来たか。これについて太祖は、外道（数論派）の神我の如き永遠不滅の霊魂思想を却けている。ただ捨身（前生）受身（今生）を現じ、その間、前後、両箇、古今の別異がないとなしている。如何なる意味から別異がないのであるか、それは本来の心光という点からである。本来の自己には幼少もなく老体もない。老幼・生死・古今を超越しているものであるから、同一人の上における隔生の宿因の業感があり得る。またこの宿因に依って、婆舎師が廿五祖となる契機となった正法眼蔵の伝付となり、未来際を濶すべく付嘱せられる所以ともなったのであるといわねばならない。

前述の如く宿因の珠が、この章の中心的関心事であるが、この珠こそは本具の霊心であり、本来の心光ともみられる。この心珠の即通が、両師の心と心とが一如となり、正法眼蔵の伝付となったものであるともみられ得るであろう。

〔第二十六章〕　第二十六祖不如密多尊者

この章にも廿六祖不如密多尊者の出家に関連した事柄として、神秘事が記述されている。即ち廿五祖婆舎斯多尊者が、廿四祖師子尊者から伝付された信衣が、火中に投ぜられても、

なお焚かれなかったという、そのことである。（このことは第二章阿難尊者の章にも記載）。これは伝付の涅槃妙心が、如何なるものにも破壊されない金剛不徹のものであるということを示しているものともみられるが、不思議なことであるのは否定できない。

さて不如密多尊者が、出家するのは俗事をなさずして、仏事をなす点にありといった、この仏事を追究して自見他見、男女の相を離却しなければ、仏事となし難い。出家について、出家とは家を捨てるということであるが、それは常識論に過ぎない。家を捨てなくても本来、家を離れ、生死涅槃や菩提煩悩をも払拭しているのが、出家の意義に他ならない。そのような出家とは何を意味しているのか、それはお互いの本来の面目についてのことでなければならない。不如密多に廿五祖が出家を許すということが、本則の本領となっているが、このことからしても、出家という問題が重要視されている訳である。このような点から真の仏事とは、本心の体認を以てその本来の意義であるとなすのである。ここに至っては、仏事俗事等の一切の対立相は泯絶される。かかる論理において、この本心体得の挙揚が、この章の精神である、といい得る。

なお問題点として、師の婆舎斯多尊者から、正法眼蔵伝付の密記を受けた時、身心釈然としたことは、受戒によって仏覚位に入るということと、軌を一にして信受されることで、この章の注目してよい点であるといい得るであろう。

〔二十七章〕 第二十七祖般若多羅尊者

この章の機縁も神秘性を帯びている。第一には廿六祖不如密多尊者が、東印度の王の奉じていた外道の長爪梵志の幻術を破し、梵志及び王等をして、仏にそして尊者に帰依せしめたこと、第二には攖恪童子、後の廿七祖、般若多羅尊者に廿六祖が過去遠劫中、同居していた昔因を説いたことである。そしてこの昔因が本則となっているという特色を示している。

拈提において、先ず空間的にいって本来具有の仏性には、仏も衆生も何等の差別はない。時間的にいって、久遠即今日である。仏性は今とともに永遠を荷負うものである。この思想の説述を前提とし、これを背景として嗣承論が述べられている。

師資の間に行われる嗣法は、古今通貫の大法の嗣続であって、証契即通を以て基盤とする。この大法は平等一味であって、歴史を超えている。超歴史的であるとともに、各個性への発揮の一面がなければならない。このような意義をはらんでいる嗣法相続の師資の間には、何らの間隙もなく、師資の心性また清浄潔白そのものであって、この間の消息は、よく外人の窺い知ることを許さないものであるといわねばならない。

なお付言ともして、廿七祖般若多羅尊者が大勢至菩薩の化

身であるとされている。これに対して、次章の第廿八祖菩提達摩尊者が、観世音菩薩の化身であるとみられているが、このことは注目されてよいことであるといわねばならない。

〔第二十八章〕　第二十八祖提達摩尊者

諸種の宝物のうち心宝にまさるものはない。心宝こそは最尊最上のものである。かかる心宝は人々本具のものであり、小なるわが内の一心に過ぎないけれども、その一心の領域つまり悟りの境地たるや宇宙を包擁し、三世を通貫するものである。なお一念有として発起しない以前の一心が無相であり、それが最も尊貴なるものであり、法性と如同しているところのこの一心こそ、最大なものであるとなす。

達摩大師は出家以前から、この一心に意を注ぎ、所謂、自然智を得ていられたのであるが、更に出家坐禅弁道により、一心を証り、先仏列祖所証の境地を明らめ得られたのである。お互いも不惜身命の精進により、大師の境地に参到すべきであろう。

なおわれわれ学人として、大師が高令の身を以て、遙々中国に渡来し、所謂、九年正身端坐、二祖慧可大師を得、禅種を下されたその労苦と芳躅とを偲ぶと共に、大師の自ら示された如く、法燈相続に充分意をもちいなくてはならない。殊に近来、諸学人が澆季末世の世であり、機根昧劣であるところから、努力せずして易きに就こうとする傾向がある。参学者はかかる敗壊に陥ることなく、身心を挙して苦修弁道するならば、諸仏の冥護があって、必ずや証得し得るに間違いないと、太祖は勧説されている。

〔第二十九章〕　第二十九祖神光慧可大師

この章にも神異の説述がある。それは坐禅中の感得であると思われる次のことである。二祖慧可大師が老儒を却け、仏門に帰して修禅していた折、定中で一神人が南の方向に進むように指示した点である。この指示に激発されて、二祖の嵩山少林寺の達摩大師の参訪となった。そして夜を徹して雪中に立ち、遂に断臂するという不惜身命の求道の熾烈さを示したことは著名である。

法を得るのには、自ら強烈な求道の意念を以てせられねばならぬ。法は他から与えられるものであるということではなくして、自ら会得すべき性質のものである。心が外境の所縁によって左右されることがなく、内心妄念の生起がないならば、法を得たものとなしうる。そしてこれは二祖の会得した心境でもある。二祖慧可大師について、お互いは二点を特に感銘したい。一は瑩山禅師の所説の如く、達摩大師が西来しても、二祖が伝通しなかったならば、禅道仏法が今に伝わないということである。一は二祖が伝通し得た所以のものは、超人的な求道に依ったその道念である。

お互いは二祖慧可大師の如き求道の念を堅持し、宿業を信

じつつ、大師所証の境地に到達すべく、一段と修行策励しなければならない。

尚この章の本則には、二祖の契悟のところが示されないで、契悟後の衣鉢相続に、直接関連したものと推測される問答が示されている。そのことは殊に注目されるべきこの章の特色の一であると思われる。

〔第三十章〕 第三十祖鑑智僧璨大師

第三十九祖、中国にしては第三祖鑑智僧璨大師が、二祖神光慧可大師に罪障に対する懺法を乞うた。これに対し二祖は罪障を媒介として、その拠っている一心の究明をなしている。一心とは自己・万法・主客一貫のものであり、宇宙大のものである。しかも自己・万法・宇宙の第一原理をなすものである。従って一定の相もなく実体もない。仏法僧の三宝も、この上に出現しているものに他ならない。本来清浄なかかる一心を具有しているお互いは、この不可得・不可称・不可思議の一心に親しく体達すべきである。これを真の見仏聞法といい、真の悟得という。

三祖の生涯をみるに、師侍していた二祖の師命に依り、一時皖公山に隠れ、周の武帝の廃仏の難を避け、後、世間に出で、四祖道信を接し、やがて大樹下にて合掌立亡している。それはわが国、臨済宗妙心寺開山、関山国師の立亡と好一対の観がある。また三祖の「信心銘」は、中国正統禅者として、纒った、しかも内容豊かな労作の嚆矢として高く評価される性質のものである。

なお当章の本則も、三祖の悟道についてのものでないばかりでなく、二祖と初相見の問答である。しかもこの問答は、二祖の弟子としてではなく、入門以前のことで、この問答を縁ともして、当問答後に弟子となっているに過ぎない。この意味から、この章の本則の特色を指摘したい。

〔三十一章〕 第三十一祖大医道信禅師

四祖大医道信禅師は概ね六十年の間、摂心して脇を着けて寝ることなく、弁道精進せられた。しかも生涯王臣に近付かず、時の皇帝の詔令にも応ぜず、名利超越の一期であった。解脱の法門によって大悟せられた禅師は、身を以て解脱道を体現せられたといってよい。

四祖について注目せられることは、次の五点であろう。㈠「伝光録」の記載に依れば、十四歳位いの若年で大悟したということになっている。かかる若さで、しかも開悟するというのは、古今他に例のないことであるといってよい。㈡上記の如く臥床せずして弁道したこと。しかもそのことは悟道の後においてである。㈢名利を徹底捨離したことは、身命を顧みない程であった。㈣城内の人々に摩訶般若を念ぜしめて、危難を免れしめたこと、㈤坐化して後一年、儀相なお生けるが如くであったこと等である。このうち特に感激深いこと

は、名利を離れていたこと、驚異に値いする程の弁道精進である。それは畢竟、禅師の解脱道の体現を如実に示すものであるといわねばならない。

解脱の道とは、人々本来具有の本心に他ならない、これを実とするとき、一切悉くが解脱の顕現となってくる。解脱道を体認するところに、われわれが親しく四祖に相見しうることとなる。四祖の如く、各自名利の念を離却し、専心修道以て本心徹見、解脱境を味得すべきであろう。

〔三十二章〕　第三十二祖大満弘忍禅師

五祖弘忍禅師は父なくして出生せられたという。すなわち五祖の前生、裁生道者であった時、四祖道信禅師に求法するや、老令であることから、生を代えての再来を促がされた。そこで裁松道者が水辺にて、衣を洗う一の女子に懇請した結果、父なくして処女懐妊ということになった。それはかのキリストの処女マリヤの懐胎話と、好一対を為す不可思議事であるといわねばならない。

憶うにそのことはまた仏性が、父母仏祖に嗣承せず、本来性のものであることを、身を以て示されたかの如くでもある。この本来具有の仏性は自己の根本である。根本たる仏性、換言すれば仏性を廓明ならしめるところに、参禅学道の本領がある。

尚、五祖とその前生である裁松道者とは、前後両身であるが、仏性は古今を貫いて一心である。と共に、道念も前後両性を一貫していることが示されている。しかしそれにもまして銘記されねばならないことは、その後、生涯を通じ、常に打坐三昧であったことである。つまり証しても尚、否証して弥々行に専念するという尊い行履である。

〔第三十三章〕　第三十三祖大鑑慧能禅師

六祖慧能は無学にして悟道した。実に特異にして代表的な祖師である。そのことは次の事蹟が雄弁に物語っている。六祖は第一に、出家前樵夫であった折、「金剛経」の一句〝応無所住而生其心〟を聴いて悟道した。第二に、「涅槃経」の文字を知らないでしかもその経意を領解した。第三に、同じく文字を知らないままに、神秀の偈文に応じて、頓悟禅の面目を偈文として遺憾なく表出した。なお六祖の特色は、具戒以前の悟道である。換言するならば、出家以前に得悟していたことなどである。これらは何をわれわれに示すものであるか、お互いが具有している根本心性は、修行を俟って始めて具足するものではなくして、修の如何に拘わらず、本来から豊かなものである。そのことを最も如実に示したものが、六祖であるということである。この点、六祖ほど端的に積極的に、身を以て闡明した祖師は稀有であるといっても過言ではない。

お互いは六祖の体現せられた所以のものに思いを效し、各自の本心を信ずると共に、太祖の提撕の如く、六祖の境地を自

らに拓開すべく、昼夜不断の精勤が肝要である。尚この章にての特筆されてよいものに、次の如きものがある。古来有名な風旛動の話と、「伝光録」説示時について、〃今夏九十日横説竪説云々〃の文章のある点である。前者については仁者の心動として、後者については正安二年の夏安居における「伝光録」の提唱を示すものとして、特に留意さるべきことであろう。

〔第三十四章〕 第三十四祖青原行思禅師

南宗頓悟禅の創始者とされる六祖大鑑慧能禅師の衣鉢を嗣いだ青原行思禅師の系統から出ているのが、他ならぬ曹洞宗である。

青原行思が衆僧の群を為して道を論ずる場合でも、師独り唯黙然としていたその静かなる風容が、後に開宗された曹洞の禅姿を、それ自体示しているものとなしうる。のみならず更にこの章には曹洞の宗風がよく出ているといってよい。それは次の如くであるからである。

青原行思は修行に優劣高下の階級を立て、次第に階級を昇ってゆくような修行のあり方を一切取らなかった。階級を立てる場合、その最高位が第一義諦としての聖諦である。階次を認容する限り聖諦があるけれども、本来階級を認めないところには聖諦すらないこととなる。

それは恰も空裡に界畔がなく、階梯の立てようがないのと如同している。聖諦を認めんか、そこに解脱しという深坑に落ちたり、法執という誤ちを犯したりすることになる。ここに青原の聖諦も亦なさないという宣示の意味がある。玄路を行じつつそれに執していない。執していないというのは、行じつつそのことを忘れている姿である。かかる行こそは仏性さながらの行である。そのものそのままが仏性の発現であるといわねばならない。

〔第三十五章〕 第三十五祖石頭希遷禅師

石頭希遷禅師は幼少の折から、保姆を煩わさず、自信に充ちた態度を持していた。それは少年時、淫祀の諸堂を破壊するというようなことにも発揮された。つまり常童とは既に異っていたといわねばならない。石頭禅師について最も著名なことは、「参同契」である。これは僧肇の「肇論」の「万物を会して己れと偽す者は、其れ唯聖人か」の句によってであった。師はこの時「聖人に己れなく、己れならざる所なし云々」といって、「参同契」を選述した。また同じく「伝光録」拈提に、石頭師の上堂語が示されているが、それも心仏衆生凡聖の一体を宣示したものである。従って「参同契」とともに、万物一体の宇宙心を開示したものに他ならない。この間の消息を体認するところに学道の本旨がある。

参禅学道には時処所縁が悉く学道の勝縁となる。その際にはただ求道者の志念が問題である。道念さえ熾烈であれば、一切のものが法を垂れ開眼の好縁となってくれる。しかも導

く正師に契当するに於ては、道眼の開かれることが更に期待されうることである。この点、青原行思禅師の払子を提起することを縁として、石頭希遷師はその心眼をひらくに至った。まことに良師を得て良材が、その本来の光りを放ったものといわねばならない。

いうまでもなく参禅学道の所以のものは、真実の自己を明らめる点にある。これなくしては真の仏弟子とはいい得られない。真の自己とは何か、それは自己の本心に他ならない、実に本心こそは宇宙の本質であり、仏祖即通のものである。本来具有のこの自性心を認得するか否かは、志を発することと、明師に遭うこととにかかっているものといわねばならない。

〔第三十六章〕　第三十六祖薬山惟儼禅師

薬山師が石頭禅師に参じた時、石頭は薬山の従来の教学的傾向を転回せしむべく、不立文字の禅の本来性から教学的知見を奪い去った。そして馬祖道一禅師の許へ行かしめた。馬祖は驀直に本来の自己の体認を以て、薬山に迫ったところ、機縁純熟もあり、薬山は悟道し得た。

悟道の後、馬祖下にて悟後の修行を為すこと三年、その間、馬祖禅師と問答を交しているが、それらの問答、及び馬祖の処から石頭へ戻った薬山の、石頭との問答から、薬山の悟ってしかも悟臭を遺さない。いわば証悟の徹底性が看取される。後、下化に立った薬山をみるに、その会下に集まった参禅者は多くなかった。がしかし雲巌曇晟・道吾円智・船子徳誠等の如き真個の道者がその膝下から輩出した。そこに薬山の道の深さと徳の偉大さとをみうる。

太祖は薬山を中心として、馬祖・石頭に参到し、薬山の法資、雲巌・道吾等と兄弟たるべく、学人の真の自己の体認を強く慫慂されている。

なおここに注意したいことは、第一に石頭師が薬山師に、馬祖師の処に行くように指示していることである。そのことは悟道の因縁が石頭の所になくして、馬祖の許にあることを、石頭禅師自らが看破しているものとみられる。注意したい第二は、普通悟道の縁を得た人をその本師とするのがならいであるとされるが、馬祖は薬山の師は石頭師であると指示している点である。ここに太祖の、青原、南嶽両家各別なく、曹溪の両角、ともに法の兄弟であり、何れに参じ何れに明らめ、且つ嗣法しても、禅道仏法の本領には相違するところがないと、広やかな見地から讃歎されるゆえんがある。それはかの臨済義玄師が黄檗希運禅師の内示によって、高安大愚の許に行き、そこで開悟、しかも黄檗に継いだのと相似している。これらについては充分注意すべきことであるといわねばならないであろう。

〔第三十七章〕　第三十七祖雲巌曇晟禅師

雲巖曇晟師は百丈懐海禅師のもとで二十年間修行して後、薬山惟儼禅師の会下に参じた。薬山は雲巖の心眼未徹をみ、悟徹の慈慮のままに問答商量、やがて雲巖は百丈の大衆説示の法について、薬山が雲巖に問うことを縁として悟道するに至った。

このことから次の四点が留意される。第一に、証悟は縁を得て成就する、つまり悟達し得る縁のある師によって果遂されるものである。第二に、雲巖が百丈下で二十年もの間修していたが、智見が開かれなかった。しかしそれはむだな年月ではなくして、その間徐々に明心悟道の基礎ができていたのである。第三に参禅学道上、師家と学人初相見の折、師家が学人に対し、何処から来たか等と問うことが多い。その問いの狙いは、学人の求道の志の浅深、悟道の因縁の有無・遠近を探る点にある。第四に参禅学道の重要事は、生死問題である。無常迅速、生死事大である。生死こそ最重要事である。生死透脱が学道の本是である。解脱というのも、この生死問題の解決と別異ではない。以上のこの四点が特にこの章から示唆を得るところのものである。

太祖は雲巖の大悟を縁として、自己の本分を明めること、換言すれば解脱することこそ、禅道修行の眼睛であることを、この章にても頗る懇切に説示されているが、これは充分肝銘さるべきことである。

〔第三十八章〕 第三十八祖洞山良价禅師

支那曹洞宗開祖洞山良价師が参学の最初、南泉普願師に参じ、次いで潙山霊祐師に参じた。潙山との問答は無情説法についてであった。潙山の許にて未徹の洞山師は、潙山の指示に依って、雲巖曇晟師に参じ、同師との問答商量に依って省悟した。

洞山が過水悟道によって参学の大事が畢ったのであるが、それに重点を置くのではなく、無情説法の悟道、そして無情説法そのものに置かれている。「本則」に通常ならば過水悟道のことを挙げた方がよいともみられるのに、雲巖との問答を示してあるのは、一は師資即通（師資の問答商量による悟入）、一は無情説法に力点が注がれているからであると思われる。無情説法の解明は、本来具有の心識（幽識）へと及び、その心識の自覚を促している。そこにこの章の趣意がある。

なおこの章にて注意される次のことどもがある。(1)上述の如く、洞上禅師が雲巖師との問答時と、その後、川を過った時との二度に渉り悟っている。前が省悟（小悟）で、後が大悟であるとみられる。しかも二度の覚悟に何れも投機の偈が頌せられていることも注目され得る。(2)前の省悟時の偈のうち、「眼処聞声」とある。耳でものを見、眼で声を聞くということは、肉耳・肉眼に依ってではなくして、心耳・心眼を

以てという意であると解される。(3)洞山師が、唯一人の子である洞山師を、乞食にまでなりながら漸くにして訪ねて来た生母を、方丈の部屋を鎖して相見しなかった。為に母は室外で愁死した。これは極めて冷淡な仕打ちであるとみられる。しかし洞山師は、このことに依り、母の愛執の妄情を断ち、後生を善処に導かんとした配慮に他ならなかった。これは常人の洞見できず、また敢偽もできないことで、悟達の人にして始めてよく為し得るところであるといわねばならない。これはかの黄檗希運禅師が、雲水修行時、自分の名を呼び叫びながら流れの中に姿を没した母に、松明を振った涙ぐましい故事と好一対であるといい得るであろう。

〔第三十九章〕　第三十九祖雲居道膺禅師

第三十九祖雲居道膺禅師の心境は頗る高邁で、師洞山禅師と殆ど対等に問答し得るほどであった。殊に洞水を見て悟道して後、洞山は曹洞禅が雲居によって流伝無窮ならんと頗る期待したことであった。しかも尚、師洞山が資道膺に真実の自己に徹すべく慫慂、道膺よくその請に応えて徹底し、大悲闡提の境地を拓開するに至った。

太祖は参学人もこの雲居の如く、真の自己徹見の境に至るべく、精進辨道することこそ参禅学道のあり方であり、大悲闡提人も、本来の面目に参到して始めて開示されることであるとされる。

なおこの章で注目されることは、次の三点である。第一に雲居禅師の悟道のことではなくして、師洞山が相許す底の雲居との問答が、本則に示されていること。第二に大悲闡提のことが提示されていること。第三に雲居師が三峰庵室に止住し、斉時に旬を経るも、洞山の斉堂に赴かなかった、それは毎日、天神の供を得ているからであった。これに対し洞山禅師が、真の自己を省察すべしとの忠告を為したのであるが、そのことにより天神の供との縁を断つに至った。これは雲居が悟道して後、更に洞山によって真の自己に参入していること、つまり悟上得悟の消息であるとみられ得る。

〔四十章〕　第四十祖同安同丕禅師

われわれは無始劫来本来恁麼人である。つまり正法眼蔵涅槃妙心の具有人である。雲居道膺禅師とその資、同安同丕師の問答の中心もこの〝恁麼〟〝恁麼事〟〝恁麼人〟ということであった。お互いはいずれもかかる涅槃妙心の具有者である。それを体認するのには、自分以外の他について求めることなく、自ら自心に親しく求め、肯認すべき性質のものである。太祖はこのことを「楞厳経」の演若達多の喩や、麻谷宝徹禅師とその弟子良遂座主との問答を例として説示せられている。

本来具有の涅槃妙心は、有無に渉らず、いわゆるの身心を絶したものである。更に云うならば、経文解義や思慮分別で

は体認し得られないものである。つまり一切の相対界を超越した絶対なものである。かかる妙心は親しく参徹するところに、参学の問題がなければならない。太祖の提示もまたここにあることを銘記すべきであろう。

なお付記したいことは、太祖が拈提に恁麽人の自省の為、高祖のことを次の如く言及している点である。〃〃謂ゆる永平開山曰く、我といふは誰ぞ、誰ぞといふは我なる故に〃と。

〔第四十一章〕 第四十一祖同安観志禅師

衆生は渇愛の念から業縁の絶えない状態にある。それは自他、依報正報の愛執で、この愛が弥〻深著し、業の因縁連綿として断えないことになる。所謂、冥より出でて冥に入る転生輪廻を繰返すものであるといわねばならない。これはいうまでもなく、現実に固執し有相に執著したすがたである。これに対し、現実を蔑視し逃避するものは、空相に執するものすがたである。有相執着は一度発心すれば脱却し得る。これに対し非相の見に執して、無色界に堕在したならば、天寿の尽きた時地獄に堕ちねばならない。このような有相・無相、いずれも世人のとかく誤って陥りがちな実態である。この両辺はいずれも捨離さるべきものである。同安観志禅師の得悟もこのところにあった。

仏弟子たるものは、よろしく仏陀釈尊の法孫たることを忘れず、如上の有無の二辺を離れねばならない。それは総てのものの執着の否定を意味する。執着から離れて仏心、即ち各自の本心に目覚めねばならない。これこそ総てのものの根源に他ならない。本心こそは時空を超越し、一点の煩悩染汚もない、円かにして絶対清浄なものである。かかる本心を体認することこそは、参禅学道者の本領であるというべきではなかろうか。

〔四十二章〕 第四十二祖梁山縁観禅師

梁山縁観師が同安観志師に参じ、衲衣下の事、つまり法衣をつけている仏弟子としての禅僧として、最も大切なことは何かという問を発して大悟した。

この章も、この禅僧として究明すべき最も重要な問題が中心となっている。この重要な問題とは、真の自己を明らめるということである。その言行において如何に秀逸であり、その威力にして如何に偉大であったとしても、自己の本心を証悟しなければ、仏祖道においては無価値である。仏弟子として真の面目はない。心地を解明せず、従らに信施を受くるにおいては、正しく堕獄の行に他ならず、真の自己を明らめなかったならば、六道に輪廻するばかりである。

真の自己の究明がなされた場合には、仏祖と並び得るようになる。真の自己を体認することは、他によるのではなく、自己が親しく自ら専一に工夫すべき性質のものである。真の

自己の究明は、余人の全く及び得ないことで、仏祖と雖も与え得る性質のものではない。よろしく自ら親しく実参実究すべきものである。太祖はこの禅の中心問題について、懇切に説述されているが、特に天上界に生れてもそこはなお迷界で、やがて転落を予想すべきものであるとしていること、又、心性は虚空の如きものであると示していること、などがこの章に示されている。殊に、〝末代悪世の初機後学〟、や〝此の一大事因縁、正像末の時隔て無く、梵漢和国異ならず。故に末法悪世と悲しむこと勿れ〟等と末法時代観が示されている。蓋し留意すべきことでなければならない。

〔第四十三章〕　第四十三祖大陽警玄禅師

大陽警玄禅師が梁山縁観禅師に無相の道場の問を発し、梁山師より却って無相の問いを得て省悟された。大陽師発悟の縁となった無相の道場が、この章の中心問題となっているのであり、太祖提示の中心もまたこの点にある。

無相の道場とは、父母未生以前の消息である。主体的には六根を帯びず、客体的には天地未萌色空未分のものであって、宇宙大のものである。従って声色を越え、耳目を絶し、六根六識の対象になり得るものではない。しかしお互いと無縁のものではない。われわれ本具の一心、即ちこの無相道場に他ならない。この点、尽大地の人、一人として餓えた人がないとされる所以である。

無相道場即一心は宇宙に拡充し、凡てのものに徹透している。その相好光明たるや実にすばらしいもので、如何なる美を尽くして表わそうとしても、表現出来得ないものである。かかる無相道場を前述の如く、お互いが自己の一心として具有している。そのことに充分憶いを效し、大陽師の如く、その本心に参徹することを、大祖は心から慫慂されている。それとともに、青原下、洞家の法孫たるに恥ぢないよう、一段と策励するよう心からの希念を示されている。

〔第四十四章〕　第四十四祖投子義青禅師

禅の相承は次第相承である。若しその間に断絶があるならば、人格から人格への面授とはならない。然るにこの章の投子義青師は、大陽警玄師に面授していない。これを面授とするならば、太陽の没後、投子が生誕している史実に相応しないことになる。面授は重要であるが、史実は厳然としていて、相承に先行する。ここに太陽・投子二師間の、代授の認容とその重要性が胚胎している。

大陽警玄禅師は適当の資がないので、浮山円鑑師に嗣法しようとした。が円鑑師はすでに臨済下の嗣法を了じていた。そこで太陽師は円鑑師に嗣続のことを依頼、太陽の頂相・袈裟・伝偈を付嘱した。後、投子義青師に円鑑師が大陽の法を代授するに至った。その折、投子の境地はすでに円熟の域に達していた。太祖はこの代授の正しい相続法に逸脱していな

いことを主張、この点から法を重くして人を軽くすべきであることを強調し、この立場から石門林間録の記述を排撃し、代授の役に任じた円鏡師所属の臨済派も尊んでいるのである。

このような論述をうけて、投子師の代授の所以を、本心に明めて得ていることにあることから、参学者の本来心を明める要あることを以て結んでいる。

この章は代授という次第相承における一大問題のところである。この章でなお注目されることは、嗣法相続について、上から順観すれば釈尊一人の通貫となり、逆観すれば大陽師一人の通貫となるという卓見が示されている点である。

〔第四十五章〕 第四十五祖芙蓉道楷禅師

仏祖の言句はわれわれの人生行路において不可欠のもの、師表とすべきものである。しかしこれを自己の外にみ、自己と仏祖の言句を、二つに見ることがあってはならない。よろしく仏祖の言句を、自心に生かしきらねばならない。この点に投子義青師の芙蓉道楷師に対する警策がある。

仏祖の言句の志向するところは、他ならぬ自己の本心の体認にある。霊々赫々たる本心そのものこそは、永遠の古から自己とともに住し、暫時も相離れることのない那一人である。これを明弁し、微塵ばかりの名利の念や慢心がなくして、身心を調えることこそ、道に親しいあり方である。そのことを道楷師の勝躅について各自々省し、修道一途に精進すべきである。

本心体認の慫慂は、他の章と異ることはない、否、「伝光録」を一貫して流れている中心思想である。がその上にこの章の特色を挙げるならば概、ね次の如くであろう。第一に正師すなわち投子師に対する恩である。その恩たるや、如何なるものを以ても比肩し得ない程尊重性を帯びたものである。第二に道楷師の名利を見ることは、眼中に屑を著るが如く徹底したものであった。このように名利を捨離し、清貧に甘んじて、正法を専一に挙揚している。第三に拈提中、洞家の宗旨、永平門下の一族、末世澆運等の語のあることなどが注目される点である。

〔第四十六章〕 第四十六祖丹霞子淳禅師

丹霞子淳師が芙蓉道楷師に、仏祖相承の精神を問うた。それは相授の意を、一句の上に示されんことの問いであった。それに対して芙蓉師は、答ふるに相授の真意を一句に限定有限化したならば、宗の真精神をそこなうということを以てした。この芙蓉師の言が、丹霞師をして大悟せしめている。

この問答の中心である相承の根本精神こそは、個性の異なりを通じ、時代と処とを一貫している絶対にして平等なものである。のみならず万人が本来悉く具有しているものに他ならない。この那一物は皮肉骨髄を帯せず、見聞覚知を超えている。一切を空じ尽くしたところに、しかも宛然として現わ

れ出る真空の境地である。真空にして　すべてのものを包擁して余すところのない宇宙大のものである。仏祖の以心伝心の妙心とはこれをいう。

更に頌古を以てこの妙心を窺うに、次の如く理解され得る。釈尊から相承せられて来た仏心は、言葉や文字を以て表現でき得ないし、他に対して示し得るものでもない。ただ親しく自らに体験せられねばならない性質のものである。

〔第四十七章〕　第四十七祖真歇清了禅師

真歇清了師（悟空禅師）が丹霞子淳師から、空劫已前の自己を問われ、丹霞から許されなかった。が後、専心参究、一日鉢盂峯にてその消息に徹した。この章はこの空却已前の自己とは何であるかが、中心問題となっている。祖師の相見するところは、何れも空劫已前の本地の風光であった。この風光は体験の世界であることはいうまでもない。体験に依らず、知解を以て会得せんとする限り、如何に巧みに説破するも、当を得てはいない。太祖は空却已前の自己を体認すべく、自己の内外悉くを放下し、打坐の工夫を慫慂している。

かくして真の自己、本地の風光に接し得た境地こそ、浄躶躶赤酒酒そのものであり、何ものによっても束縛されることなく、しかも変に応じて自由自在、妙有無尋の働きをなすに至る。

最も近くして、しかも最も遠い自己の本来性は、しかしながら容易に証得されうるものではない。徒らに時光を空費することなく、驀直に究尽するところ、徹証は実に一弾指の間にある。それだけにも、大いに精進一番すべきことを、太祖は切に学人に対し説示されている。

なおこの章で注目されることは、丹霞師の正師としての偉大さである。即ち真歇師が道に承当して帰来、丹霞師の前に立って、一言も発しないのにも拘わらず、丹霞師が悟道して来たことを見てとり、一掌を以て印可し、〝将に謂へり爾有ることを知る〟と賞讃している。このように言詮の媒介に依らず、その風貌を一見したのみで、その真を徹見することこそ、まことの知識というべく、そこにわれわれは祖師の真価をみる憶いを懐く。

〔第四十八章〕　第四十八祖天童宗珏禅師

天童宗珏師が真歇清了師の侍者となり、日々夜々、専心一意、参禅問法していた。清了師が弥〻宗珏師の心境の熟したのを看取し、清了師から問いが発せられた。ここに於いて真歇清了師と、天童宗珏師と、向上事について、真剣そのものの問答商事が交わされた結果、宗珏師の開悟が、将来されている。

仏祖向上の事とは、父母未生以前の消息、つまり過現未三世を通貫して変らない真実の自己をいう。この真の自己とは、本来仏道中の自己であるということに他ならない。この境地は単に自分一人に留まらず、広く自他有情非情を一切包擁し

て、悉くが仏道の全現成であるということを体認するのを内容としている。即ち自他一如の証契であり、自他同時脱落である。

真の自己、換言すれば人々具足の妙心は、他に伝えたり、他から受けたりし得るものではない。所謂、「向上一路千聖不伝」である。ただ自らに親しく体得すべきものである。体認することなくして、心慮を廻らし、種々言を発しても、徒らに二に落ち三に落つるのみである。一度覚触して始めて真実の語を発する分がある。妙心の体験、これは広くして禅の精神であるとともに、この章の本領であり、且つまた太祖の意図せられているところであある。

〔第四十九章〕 第四十九祖雪竇智鑑禅師

雪竇智鑑師は象山にて省悟後、天童宗珏師が「涅槃経」如来性品の、「世尊有二密語一迦葉不二覆蔵一」と上堂普説するのを聴いて大悟。

世尊の密語とは本来具有の本来心に他ならない。敢えてこのことを秘密にするのではないが、これを悟らないものには秘密に受け取られるばかりである。本来の面目、それは口なく言なく、四大六根を帯びない無面目のものである。一切の有相を離れたものであるから、心とも性とも、仏とも法とも名付けようがない。唯、赫々たる光りが明明と有るばかりである。しかしそれはいわゆるの火光、水光でもない。世界壊するも壊せず、万物生起するも変ぜず、仏祖力を以てするも如何ともなし難いものである。明々惶々というが、そこには能所の対立はない。

お互い昔の善根力によって得難い人身を受けてきたものである。しかも親しくこの境地に証到しなかったならば、再び三界六道に輪廻して閻羅の手に掛ることになる。ここに憶いをいたし、男女僧俗の別なく等しく六根六境の相対を亡じ、心意識の運転を休息し、憤発心を純一にし、以て驀直に根源を識得解脱せられたい、と太祖は切望提唱せられている。

〔第五十章〕 第五十祖天童如浄禅師

天童如浄師は雪竇智鑑師より、不染汚の問いを得、一年余りの参究の後、徹証した。これは浄祖が東司清掃の役、つまり浄頭を望んだ時、雪竇師が〝曾て染汚せざる処如何が浄頭せん、若し道い得ば汝を浄頭に充てん〟として、敢えて浄祖を究明に導いたことを縁としたものであった。

お互いは本来不染汚人である。そこに尚洗浄の要があるであろうか、これは実に如浄禅師参究の要点であった。本来不染汚であるから、この本来底に身心共に打成一片たるべく如浄師の如く、他意なく打坐中心の専一の工夫こそ肝要である。

なお特に注目すべきことは、浄祖が生涯名利を捨離していたことである。即ち芙蓉道楷師より伝持の袈裟を着せず、黒

色の袈裟、綴子（直綴）を著け、皇帝よりの紫衣師号を辞し、一生国王大臣に親近しなかった。そして貫ぬくに道心の堅持、只管打坐を以てした。その打坐精進たるや、臀肉の穿った時も休むことなく、生涯一日として坐禅しない日がなかった。ここにわが永平高祖の正師として仰ぎ、且つ嗣承した所以のあることを肝銘すべきであろう。

〔五十一章〕　第五十一祖希玄道元禅師

道元禅師の発心修道、就中、在宋時代の求法を委細に渉って説述、殊に又、諸種の嗣書拝見の好縁に就いて記述されている。さて天童浄祖の印証を得て、一生の大事を弁じたのは他ならぬ身心脱落である。この身心脱落底の本心について、太祖は次の如く説破している。第一に心に二種がある。一は思量分別心、二は寂湛不動心である。第二に心に三種がある。心意識の三種の心である。これらの心は何れも本心ではない。かかる心を離脱し超越したところに、歴劫長堅の一段の霊光がある。これこそ本心であり、この心を証得するのが身心脱落である。

禅の本領は、この人々本来具有の正法眼蔵涅槃妙心を親しく体認するところにある。この涅槃妙心、いい換えるならば本心に承当することが、身心脱落の消息である。お互いはよろしくこの消息について、実参実究すべきである。高祖道元禅師も「本来本法性、天然自性身云々」の疑団を身心脱落することによって解決せられたのである。修を疎そかにすることなくして、禅師の面目に相見すべきであろう。

なおこの章に注目されてよいものとして、次の記載がある。一は〃時澆運に向ひ世の末法に遭うて〃という末法時代観である。他の一は次の如き奇特事である。高祖が興聖寺に住山中、神明が来て戒法を聴き、布薩毎に参伺した。更に永平寺に於いては竜神が来て、日々八斎戒の回向を請うた。為に禅師は日々その如く八斎戒を書いて回向せられたが、永平寺にては、今に至るまで怠ることがないと。

〔五十二章〕　第五十二祖孤雲懐奘禅師

二祖孤雲懐奘禅師は、母の訓誡懇請により、生涯名利の念を捨離し、黒衣の非人としての求法者たることを本是とせられた。最初は広く諸宗の教学について、学得するところがあった。即ち倶舎・成実・天台・浄土、更に三宝寺の大日能忍の上足、仏地覚晏について、禅要をも修得せれたのである。

やがて高祖道元禅師に参じ〃一毫衆穴を穿つ〃の因縁を聞いて大悟、印可せれられることとなった。後、自ら世寿の高祖に越える身でありながら、法を重んぜられた二祖は、高祖に随侍すること廿年、その間、師資の道は、文字の如く一如に合融されていた。

永平の法席を継いで後十五年、つまり高祖亡き後も、方丈の傍らに高祖の影を安置奉持された。のみならず自己の没後、

自らの遺骨をして、先師の塔の侍者位に埋めしめて、別に塔を立てないこと、又没後の自己の追忌も、先師忌八ケ日のうちの、一日のみに限るよう願われたことである。まことに師を敬慕すること、二祖こそ実に特筆さるべきものであるといわねばならない。

さて二祖の如実に示されている如く、参禅学道には多聞、広学の要はない。よろしく真実に道念を発し、仏道の本源に志向し、心要を明らむべきである。そうでないならば、徒らに三世に輪廻する徒に止まるであろう。真箇の発心は機を択ばない、のみならず道念の向うところ、如何なる障碍も碍げとはならない。何とならば障碍をのり越え、それらを悉く自己の仏道修行の具に消融してゆくのが、道念のあり方であるからである。

なお懐奘師の母が病い重く、母が最後の対面を望んだ時、大衆は皆、制を破っても逢いに往くべきであるといった。しかし師は、悲母の人情に随い、古仏の垂範に背くようであるならば、慈母最後の大罪となるべしとして、衆議に従わなかった。その法を重くして、人情を軽くする仏者のあり方は、大いに肝銘を深くすべきことであろう。

（二）

以上は各章の要旨である。次に最初に特記した如く、如上の要旨を更に縮め、所謂、要旨の要点に移りたい。

〔**首章**〕釈尊の大覚成道に依って、釈尊が仏陀となられ、仏道が開かれたのである。総ては釈尊の成道に始まっている。お互いも成道を釈尊にのみ、みることなく、自らの上に釈尊の成道を生かさねばならない。ここに真の釈尊成道の意義がある。〔**第一章**〕お互いが自己の正法の眼を参得するならば、釈尊が華を拈じて空間的に不変であり、迦葉が破顔して時間的に長令である那一物に親しみ得る。この境地体認に折角、精進すべきである。〔**第二章**〕阿難尊者は多聞博識強記の代表者である。しかしそのまま、仏心体認に連なるものではない。刹竿を倒却大悟した阿難の如く、学人も煩悩障を倒却し、各自の本具の仏心に相見すべきである。〔**第三章**〕機根の如何に拘わらず、人皆本来本性（証）中のものである。そのことの自覚に立って折角と弁道すべきであろう。〔**第四章**〕一度煩悩・相対の妄念を空じ去り、諸仏の妙法を親しく体認すべきことが強く要請されてある。〔**第五章**〕出家の真意は宇宙心の体認にある。本心こそ宇宙心に他ならない。それを大悟して始めてその真底の味得がある。大乗の妙理は知解に止っていてはならない。心すべきは悟道明心である。〔**第六章**〕大乗は無漏道であるから、無所得・無所悟でなければならない。無漏大乗の本質は、法性海と如同しているお互いの本心である。この本心を体認して真の自己に相

見すべきである。〔**第七章**〕本来心は師資一如で、虚凝一片の田地である。それは他から受けることでもできないし、与えることもできない。この師資通貫の那一宝を切に体認すべきである。〔**第八章**〕仏道は言詮によらず体験によるべきである。仏祖何れも大悟の人である。参学者も依文解義に止まらず、実参実究、己事を究明すべきである。〔**第九章**〕自己の本来心は自佗・万法一貫の宇宙心である。この一心の外に有相の仏を求める要がない。直ちに意根を坐断し、見性成仏すべきである。〔**第十章**〕了義経である大乗経典の真義は涅槃である。禅では本来心という。これを体認するのが一生参学の大事である。心地開明すべく脇を付けて臥することのなかったことが、実に三年にも及んだ脇尊者を模範ともして、発心し弁道精進すべきである。〔**第十一章**〕自己の本心に契当するには、知的努力を止め、思慮分別を捨離し、無我無心に祖師道参究を実地に親しく履践すべきである。〔**第十二章**〕本心は平等一相で差別がない。師資の本心も同一味で、師資相承も、本心の相即相入である。この本具の一心を体認し、以て不疑の地に到るべきである。〔**十三章**〕凡ゆる世界の現象・三昧等は、悉く仏性海中のものである。各自は仏性を具有しつつ仏性に包まれている。自己本地の風光即仏性である。この認得に立っての体認こそ肝要である。〔**第十四章**〕本具の一心の証得が中心であるが、なお禅道修行は叢林にて為すべきである。修道の間、常に利他の念を持すべきである。なお当章にて神通力は、自心証得に及ばない等の諸問題が提示されている。〔**第十五章**〕師資即通は、自性清浄心体験の境地の即通である。この境は如何なるものにも左右されない絶対なもので、これを証得するところに禅の本旨がある。〔**第十六章**〕お互いは如来の正法輪に遇い得た多幸を悦び、光陰を惜しみ、真の自己を体認すべく折角と弁道すべきである。〔**第十七章**〕仏教の本質である無我は、真我であり、禅定に依って体現せられる。神秘性も無我を根基とするところに、その仏教的意義がある。末世に於いて精進修行、以て無我を証し、人生々活上に発揚すべきである。〔**第十八章**〕風鈴の問答から心鳴であるとする。心鳴の心とは宇宙大の一心で、この一心即ち本心を会得するところに、時空一貫の仏祖の証契に参徹し得る。なお世寿が百歳であっても、無量寿から見れば寸時に過ぎない。諸仏の要機を会得すれば、無量寿の真義を証得したことになる。〔**第十九章**〕宿命智は六神通の一ではなく、心の本源を知る智であるとする。この智は本来不変の自性で、久遠実成の如来である。自己の本来性を知るこの智に達するのが大悟である。〔**第二十章**〕因果業報の理は曇まし得ない。惑業の基は不覚無明である。しかもその本源は本心である。本来清浄の本心を識得すれば、無明を破し、清白円明の諸仏の境地に契当し得るから、本心を悟得

すべきである。なお三時業報の信に立って、参学者が悪名を受けたり、他から誹謗されたりするような場合でも、宿業の消滅であると思い、弥々精進すべきである。〔**二十一章**〕無漏智とは本来自己保任の心宝で、これから逸脱した学道は、如何に優れたものであっても、本道に連なるものではない。参学者は世親論師の如く、無漏智を発すべく、即今自己方寸の中に向って、子細に工夫すべきである。〔**第二十二章**〕心の本性は虚空の如く、無限定にして、一切を包擁し、一切処にあらわれる。常住であるが、固定視し執著すべきものではない。かかる心は知的に把えられてはならないので、実の如く体認さるべきものである。〔**第二十三章**〕自心の無上の法宝は、古今の情を越え、生仏・煩悩菩提等の対待を離却している。本心の参究こそ重要である。なお仏祖の大法の嗣続、つまり面授嗣法を了ぜなくては、真の仏祖の伝燈承受者とはなり得ない。〔**第二十四章**〕仏道修行のあり方は、無所得・無所期、たゞ純一に実参実究するところにある。その参究のあり方は、行ずる自己と、行ぜられる道との融合にある。これが本来具有の仏心体得の奥義に他ならない。〔**第二十五章**〕二十五祖婆舎斯多は生来珠を握っていた。この珠は前生からのもので、本来具有心ともいうべきものである。この心珠の即通が師資一如となり得た所以である。なお二十五祖懐妊時、母が神剣を得ると夢みたという。〔**第二十六章**〕出家とは家を捨てなくても、お互いの本来の面目を明めるものの謂でなくてはならない。かかる点に立って、本心体得が挙揚される。なお二十五祖が二十四祖から伝付された信衣が火中に投ぜられても、なお焚かれなかった。これは、涅槃妙心の、金剛不壊のものであることを示しているものともみられる。

〔**第二十七章**〕師資間の嗣法は、古今通貫の大法の嗣続である。その大法は平等一味、超歴史的であって、しかも各個性の発揮がある。これは仏性の永遠を荷負いながら、現在に生きるのと相即して考えられ得る。その師資間の心性は、清浄潔白そのものである。なお二十七祖、般若多羅が大勢至、次の二十八祖菩提達摩が観世音の各化身であるということが注目される。〔**第二十八章**〕諸種の宝物のうち、心宝こそ最尊最上のものである。かかる心宝は人々本具のもので、宇宙を包擁し、三世を通貫するものである。菩提達摩は坐禅弁道に依り、この一心を明められたのであるが、お互いも、末世、機根昧劣の故を以て、易きにつくことなく、苦修策励すべきである。その心根があるならば諸仏の冥護により、必ず証得し得るのである。〔**第二十九章**〕お互いは、二祖慧可の如き強烈な求道の意念を以て、宿業を信じつつ、慧可大師所証の境地に至るべく、不惜身命の修行を為さなくてはならない。なおこの章に神異の説述がある。それは定中で一神人が、南の方向に進むよう。つまり達摩参訪を指示したという

点である。〔**第三十章**〕三祖僧璨が、二祖に懺法を乞うや、二祖は罪障を媒介として、一心の究明を開示している。一心具有の各自も、この不可得・不可称・不可思議の那一物に体達すべきである。〔**第三十一章**〕解脱道とは、人々本来具有の本心を実とすることである。その時、一切が解脱の顕現となってくる。四祖道信の如く、各自も名利の念を離却し、専心修道、以て解脱境を味得すべきである。〔**第三十二章**〕五祖弘忍は、仏性が、父母仏祖に嗣承せず、本来性のものであることを、身を以て示されていると看取される。自己の根基たるこの仏性を廓明ならしめるところに、参禅学道の本領がある。お互いが特に五祖に学ぶべきは、五祖が証して更に、否、証して弥々行に専念された点である。なお五祖が前生にて、処女懐妊したことは不可思議事として特記されてよい。〔**第三十三章**〕六祖慧能は生来の智者であった。そして出家以前に得悟していた。それは各自具有の根本心性は、修行を俟って始めて具足するものではなくして、本来性のものであることを如実に示している。各自も六祖の境地を、自らに拓開すべく不断の精勤が肝要である。なお当章に、古来有名な風旛動の話と、「伝光録」について、今夏九十日説示とあることも注目せられる。〔**第三十四章**〕第三十四祖青原行思は、修行に優劣高下の階級差別を身を以て否定した。それは恰も空裡に界畔のないのと同様である。玄路を行じつゝ、その執を離れる。かかる行のあり方こそは、仏性さながらの行であり、曹洞禅の禅風を示すものである。〔**第三十五章**〕石頭希遷の「参同契」及び上堂語は、万物一体の宇宙心を開示している。この間の消息の体認が、学道の本旨である。しかも学道には一心体達の道念と、それを導く正師が肝要である。〔**第三十六章**〕薬山惟儼が石頭の指示に依り、馬祖道一に参じその許で悟道、悟道後、悟臭を遺さない悟後の修行を為している。太祖は薬山を中心とした諸禅匠と法の兄弟たるべく、真の自己の体認を慫慂している。なお太祖の、青原・南嶽両家別なく、共に法の兄弟であるとの説示が注目される。〔**第三十七章**〕たとい明心悟道することができなくても、修行は決して無駄ではない。専心修行に励むならば、次第に覚悟の域に近付き得る。悟道こそ、禅道修行の眼睛であるといわねばならない。〔**第三十八章**〕洞山良价が、師雲巌曇晟と無情説法の話に依り、心識の自証（省悟）を為している。これは心耳・心眼に依る達識として注目せられる。なお洞山が、乞食にまでなりながらの来訪の生母に相見しなかったのは、母の恩愛の妄情を断ち、後生善処に導かんとする配慮に他ならなかったことは、偉大なる禅者にして、始めて敢為されることといわねばならない。〔**第三十九章**〕洞山が自分と対等に、問答しうる雲居道膺に、なお真の自己に徹すべく慫慂、道膺よくその請に応えて徹底し、大悲闡提の境地を拓開した。参

禅人も真の自己を徹見して、はじめて大悲闡提人たりうる。なお特記したいのは、雲居が悟道し、後、更に洞山の言に依り悟上得悟している点である。〔**第四十章**〕われわれは無始劫来、本来恁麼人、つまり涅槃妙心の具有者である。それを体認するのには、自分以外の他について求めることなく、自心に親しく体認すべき性質のものである。太祖はそのことについて経典や先哲の例を以て説示している。〔**第四十一章**〕有相・無相の二辺に執することを離れる。それは総てのものの執着を否定する。執着から離れて、仏心即ち各自の本心に目覚めねばならない。これこそは参禅学道者の本領である。〔**第四十二章**〕禅僧として最も重要な問題は、真の自己を明めるということである。これを為さなかったならば、仏祖道において無価値である。仏弟子として、心地を解明せず、徒らに信施を受けることは、堕獄の行である。自己の究明は、他によることなく、自己が親しく自ら専一に工夫すべき性質のものである。なおこの章にて、天上界も迷界である。心性は虚空の如きものであることと、末法時代観の肯認とがみられる。〔**第四十三章**〕太陽警玄発悟の縁となった無相の道場とは、父母未生以前の消息である。主体的には六根を帯びず、客体的に天地未萠色空未分で、宇宙大のものである。われわれ本具の一心こそは、無相道場である。無相道場即一心の相好光明は、実にすばらしいもので、如何なる美を尽くしても、表現出来得ない。かかる本心に、太陽師の如く、よろしく参徹すべきである。〔**第四十四章**〕禅の相承は次第相承である。面授である。しかるに第四三祖大陽警玄と、第四十四祖投子義青とは、面授ではなくして代授である。太祖は代授を認容、代授の役に任じた浮山円鑑、並びにその所属の臨済派をも尊んでいる。特に投子の代授の所以が、本心を明め得ていることから、参学者の本来心を明める要あることを強調している。なお嗣法相続について、順逆観の卓見がみられる。〔**第四十五章**〕仏祖の言句は人生行路の師表である。これを自心に生かし切らねばならない。その方途は自己の本心の体認にある。このことを明弁し、微塵ばかりの名利の念や慢心もなく、自心を調整すべきである。〔**第四十六章**〕仏祖相承の精神は、時処人を一貫している絶対にして平等なものである。これは各自本来具有の那一物である。しかも言句では把え得られないもの、体験によってのみ親しく味得さるべき性質のものに他ならない。〔**第四十七章**〕祖師の相見底は空劫已前の自己である。所謂、本地の風光である。太祖はこの風光に接すべく、一切を放下し、打坐工夫を慫慂している。この風光証得の暁は、絶対自由、妙有無碍の妙用が開示される。なお注目されるのは、丹霞子淳が、真歇清了を一見したのみで、悟道して来たことを見透した真の知識者という点である。〔**第四十八章**〕第五七祖真歇と四八祖天童宗珏

との問答の仏祖向上事とは、三世通貫不変の真実の自己をいう。それは本来仏道中のものであり、自他有情非情、悉くを包擁しているものである。従って真の自己の参徹は、自他同時脱落に他ならない。この間の消息は一度覚触して始めて真実語を発し得る分がある。〔**第四十九章**〕第四十九祖雪竇智鑑の大悟機縁の語である世尊の密語とは、本来心である。これを悟らないものに取っては密語に他ない。親しくこの境地に証到しないならば、再び三界六道に流転もしなければならない。よろしく発心を純一にし、驀直に根源を識得解脱するようにとの太祖の懇請である。〔**第五十章**〕お互いは本来、不染汚人である。この本来底に身心共に打成一片となって天童如浄の如く、専一に打坐中心の工夫が肝要である。なお注目すべきことは、如浄師が生涯名利を捨離、道心頗る堅固で、猛精進の打坐三昧を以て終始した点である。〔**第五十一章**〕いわゆるの心には諸種が類別される。しかし一切の派生的心を離却超越したところに、歴劫長堅の一段の霊光がある。これこそ本心であり、この心を証得したのが道元の身心脱落である。修を疎ろそかにすることなく、禅師の面目に相見すべきであろう。なお注目されることは、道元の末法時代観と、諸神教化の点である。〔**第五十二章**〕参禅学道には、多聞広学の要はない。よろしく真実の道念に立って、仏道の本源に志向して、心要を明むべきである。心要を得たところ、孤雲懐奘の師道元から印可を得た如く、よく一毫衆穴を穿つに至るであろう。なお特記したいのは、懐奘が、高祖より世寿に長じているにも拘わらず、最高ともいうべき師礼を尽くしたこと、法を重んじて世情を軽んじた真箇の仏者であった点等である。

上来、「伝光録」各章の要旨の更にその要旨を攻究してきた。その上に立って、「伝光録」の根本思想追求に進みたい。いうまでもなく、禅・仏教は釈尊の大覚成道に発している。「伝光録」も釈尊の大覚に発し、その大聖の覚悟が本録一貫のもので、それが伝光の「光」である。この光こそ仏祖道であり、お互いにしては本来心である。

本来心は又、「伝光録」所載のものと参照して、次の如き諸語を以て表示し得る。本心・那一物・那一宝・空劫已前の自己、仏心・仏性・法性、諸仏の妙法、一心・涅槃・心地・本地・自性清浄心・真我・無漏智・心珠・心宝・円鑑・心要・霊光・本来の面目、不染汚心・恁麼、或いは仏祖向上事、世尊の密語、無相の道場、歴劫長堅等。これら諸語の志向する内意は、本心を実とすべきことの要請に他ならない。本来心の覚悟である。伝法相続とは、このことの嗣続に他ならない。尤も他面、無所得・無所悟の待悟否定説もあるが、主軸は釈尊の大覚成道に発する祖師道の本心の悟道に立脚した覚証の切要である。悟道思想は、黙照禅の創唱者宏智正覚に

も、又わが永平高祖にも見られる。それは看話禅の創唱者大慧宗杲に、待悟否定思想が見られるのと対応する。のみならず天童如浄をはじめ、当時の禅者に看話・黙照両禅が渾然一体となっていたこととともあわせ考えてみた場合、太祖にかかる思想の看取されることは、太祖が他に待悟否定思想のあることと照応して、敢えて不思議ではないとなし得る。

当覚悟の主張は、「伝光録」講説の対機が、参禅学道者である関係から、当然のこととすらいい得るであろう。兎に角、太祖が切に本心覚悟を要望されていることは否み得ない。これが本録の根本思想であり、基本姿勢であるといわねばならない。

その他、概ね次の如き諸事項の提示がある。利他の念、因果業報思想、宿命通、面授嗣法、正師、生死問題、大悲闡提、末法時代観等。これらの諸問題は、「伝光録」所説のそれらの全部ではない。兎に角かかる諸問題が散説されてはいるが、これらは右の本来心究明を軸としての諸展開に他ならない、ということを銘記したい。（当論稿は、昭和五十六年度、「伝光録」についての、全国各地における異本調査研究とともに、本学特別研究助成に依る研究の一部である。）